

前植民地期ベトナムにおける反キリスト教運動の 発生メカニズムの解明

牧野元紀

公益財団法人東洋文庫 普及展示部主幹研究員

緒言

本研究の目的は、19世紀末のベトナムで生じた二つの大きな動乱、「文紳の乱」(1874年)と「勤王蜂起」(1885年)の発生メカニズムを解明することにある。フランスはこの二つの動乱の鎮圧をとおしてベトナムの植民地化を達成した。ベトナム近代史研究において重要な意義を持つ事件である。

しかし、ベトナム国内を中心に歴史研究者における「公定史観」(反植民地・反帝国主義、愛国主義、マルクス主義等に依拠した歴史観)の限界と、関連史料の不足により、この二つの動乱を分析対象とした先行研究の多くは、ベトナム国外在住の研究者のものも含めていささか画一的かつ硬直的傾向がみられる。

二つの動乱はともに「文紳」と称される在郷の儒教知識人層が主導した。彼らはフランスの侵略に対抗する愛国心の発露から、フランスの手先とみなしたキリスト教徒を攻撃したとの言説が支配的である。キリスト教信者が居住する村落の多くは文紳に先導された非信者の住民に焼き払われ、信者側の犠牲者は10数万人に及んだという。

この動乱において、文紳は文字通りの“火付け役”であり、その“功績”は彼らが支持する現地政権の阮朝(1802-1945年)側の皇帝実録(『大南寔録』)に断片的に記される。他方、“被害”を受けた側のキリスト教会側は現地居住の宣教師が被害の状況をその都度ヨーロッパの本部へ伝えた。一部は年次報告として公刊(『信仰普及年報』)され、フランスを中心に教会関係者や信者の目に触れることになった。

これら『大南寔録』および『信仰普及協会年報』を根本資料とする論文、あるいはそれを引用した二次文献に依拠した論文が本研究分野における2000年代初頭までのメインストリームである。

しかし、2000年代に入ってから史料状況が一変した。ベトナムのカトリック布教を担当したバリ外国宣教会

(MEP)が所蔵史料を一般に公開し始めたのである。宣教師が書き残した書簡報告からは公刊資料に現れない現地情報を見出せるようになった。

この史料状況の好転により、文紳側と教会側双方の動きを追うことが可能となった。本研究はこれまでに一般化した上記の定式からは離れ、当事者であった双方の立場から、動乱の発生メカニズムをありのままに明示することを目指す。

前史

二つの動乱に先立つ半世紀前、ベトナムを統治する阮朝は儒教原理に基づく一元的中央集権化を進め、その障害となる国内諸勢力のうち、特にキリスト教勢力を弾圧した。キリスト教が元々は外来宗教であり、布教の主な担い手がヨーロッパ人宣教師であったことから、阮朝に敵対する外国勢力と容易に結びつくことを危惧したのである。

度重なる宣教師の処刑を伴う厳しい弾圧に抗し、全国各地の草の根レベルで約200年の布教活動を展開してきたMEPは本国フランスに救援を求めた。その要請に対して、1858年、ナポレオン3世政府は軍事介入という形で応えた。以後、キリスト教の保護と通商の自由を求めるフランスは侵攻を続け、1887年の仏領インドシナ連邦の成立をもってベトナムの植民地化を完結した。キリスト教はフランスとのかわりにおいて、ベトナムの近代を運命づけたといえよう。

筆者はこれまで17世紀中葉から19世紀前半にかけての前近代ベトナムにおけるキリスト教村落の形成と変容の過程を分析してきた。「漢字・儒教」をキータームとする前近代東アジアにおいて、何故ベトナムではキリスト教がかくも広範に支持を得られたのか。博士学位論文では、MEPと現地政権双方の資料の収集・分析をとおして、その主要因をキリスト教村落と非キリスト教村落との間にみられた社会的・文化的連続性に求めた。

19世紀前半までは存在したと考えられる村落レベルでのキリスト教信者・非信者との間の社会的・文化的連続性が、同世紀の後半に至って、いかに変容したのか。両者の間にかくも深刻な対立が生じてしまったのは何故なのか。新出史料の分析から考察を進めたのが本研究である。

方法 資料

日本およびフランスにおいて可能な限り広範な史資料の収集を行った。分析を順次進めているところである。収集資料は、一次資料においては現物をデジタルカメラで撮影したもの、マイクロフィルムから紙焼きしたものからなる。二次資料においては現物書籍の購入および論文等の複写物からなる。

日本では東洋文庫が所蔵する『大南寔録』、『信仰普及協会年報』所収の関連記事を探索し、必要と思われる部分を撮影し、文字情報については自作データベースソフトに手打ちで入力した。

フランスでは MEP 文書館が所蔵する宣教師書簡ファイルの目録を手掛かりに、(滞在時間も限られるため)必要と思わしき書簡についてはマイクロフィルムからの紙焼きを行った。書簡数は当初の想定をこえる数に上り(嬉しい誤算ではあるが)、ほぼ全てが難読な手書きでもあるため、読解の完了にはなお時間を要するものと思われる。

分析

分析作業は現在も続行中であるが、その具体的方法を略述する。「局面の変化」、「地域性」、「主要人物」という3つの視点を“パラメータ”として、キリスト教住民が比較的数量多く居住した北部および北中部における村落の動態を追跡する。文紳が主導した反キリスト教運動の発生メカニズムとその拡大プロセスが、この分析視角をつうじて次第に姿を現し始めた。

1. 局面の変化：内外の政治・社会の変動に鑑み以下の三期に区分した。

I. 1858 - 1862年：フランスの軍事侵攻とサイゴン条約の締結（カトリック信仰公認）

II. 1862 - 1874年：反キリスト教運動の発生と社会不安の増大

III. 1874 - 1887年：「文紳の乱」の勃発から「勤王運動」

の終息まで

2. 地域性：北部から北中部にかけてキリスト教徒が多く居住する主要3地域を分析対象とした。

①「MEP 南トンキン代牧区」（ゲアン、ハティン地方）

②「MEP 西トンキン代牧区」（ハノイ、ニンビン、ナムディン、タインホア地方等）

③「ドミニコ会東トンキン・中央トンキン代牧区」（ハイズオン、クアンニン地方等）

この3地域で発生した反キリスト教運動について、発生経緯、形態、被害状況を基に地域的特徴（政治・経済・文化要因や生態・環境要因等）を抽出しており、①および②についてはデータの整理を進めている。③についてはスペインのドミニコ会所蔵史料となるため、スペインあるいは当時本部が置かれたフィリピン等での資料調査が今後必要となることが判明した。

3. 主要人物：反キリスト教運動の発生と拡大における人的要因を検討した。以下の4階層に分類を行い、分析を進めた。

A. 教会側（欧州人宣教師、現地人聖職者）

B. 阮朝側（皇帝、高官、キリスト教官人、反キリスト教官人、中下級官吏）

C. 在地有力者層（文紳、キリスト教村落の指導者）

D. 村落の一般住民層（キリスト教信者、非信者）

教会側史料と阮朝側史料との照合により各人物の比定を行っている。反カトリック運動が時代や地域に必ずしも限定されず、個々の人物の指向に左右される場合も起こりうることを確認できた。

結果

収集史料の読解と、上記パラメータ1で区分した時系列にしたがい分析を進めた結果、以下の事柄が現時において明らかとなっている。

I. 1858-1862年：フランスの侵攻と阮朝の弾圧強化が文紳層にもたらしたもの

1858年以降、フランスの軍事侵攻に対する報復として、阮朝はカトリックコミュニティが所有した財産を没収し、信者と非信者を隔離し、それぞれに集住を命令した。没収財産は非カトリックの有力者である文紳層に与され、信者は彼らの監視下に置かれた。

阮朝政府主導のカトリックに対する弾圧はサイゴン条

約締結による信仰の公認（1862年）直前まで続く。北部3地域におけるカトリックコミュニティと非カトリックコミュニティとの関係性はこの時点で明らかに変容したとみられる。阮朝政府が行ったこの村落再編成は、村落社会内の政治面・経済面におけるヘゲモニー掌握を志向する文紳層勢力拡大に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。

II. 1862-1874年：反カトリック運動はゲアン・ハティン地方で激化

サイゴン条約の締結後、阮朝政府は没収財産の返還を各村落に命じる。しかし、これに応じる文紳層はあまり多くなかった。現地村落レベルで（阮朝政府主導の弾圧ではない）反カトリック運動が生じるのはこの時期以降である。

最初に火の手が上がり、カトリック・非カトリックの間で対立が激化したのはMEP南トンキン代牧区の管轄下にあるゲアン・ハティン地方である。両地方はカトリック勢力が19世紀前半まで3世紀以上に及ぶ安定的発展をとげており、他の地方で弾圧が行われていても安寧が保たれ続けた地方であった。

それにもかかわらず、19世紀後半のこの時期に対立が先鋭化したのは、南トンキン代牧区の初代代牧ゴティエ司教の活動が多分に影響している。代牧区内でカトリック信者のみからなるコミュニティを積極的に立ち上げ、サイゴン条約締結にあたってフランス政府と阮朝政府との間で積極的に立ちまわった人物である。同僚の宣教師は、阮朝宮廷内に司教に反感を抱く高官が少なからず存在したことを指摘している。司教の地元であるゲアン・ハティン両地方は宮廷の反対勢力に敢えて狙われたとみることも可能である。

時期を同じくして、フランスに敗北した中央政府の権威は北部において特に揺らぎが生じ、反乱の頻発や匪賊の増加がみられ始めた。こうした社会不安に対して各村落では自衛団が組織され、それを文紳層が統率した。文紳は軍事面においても力をつけ始めた。

III. 1874-1887年：文紳が主導した反カトリック運動の実質的背景

1870～80年代に相次いで起こった「文紳の乱」と「勤王蜂起」は、ゲアン・ハティン両地方と北部の紅河デルタ村落一帯で回覧された檄文に呼応した。その内容は朱子学的名分論に則っており、さながらベトナム版の尊王

攘夷運動ともいえる。亡国の危機が叫ばれ、フランスとカトリックへの徹底抗戦が呼びかけられた。

先行研究の多くは、これが阮朝による反乱鎮圧を受けて分裂を余儀なくされた文紳層の間に“伝統的”な儒学的価値観を再活性化し、反カトリック運動と愛国主義（ナショナリズム）の高揚をもたらしたことを繰り返して論じてきた。

しかし、上記1と2に沿った検討を進めた結果、反カトリック運動の本質は必ずしも儒教原理に留まらなかったことは明らかである。文紳側もカトリック側も、めまぐるしく変動する社会状況のなか得られた権益の配分をめぐる衝突したことが推察される。

今後の見通し

新出史料の公開を受けて、日本とフランスで既に収集を終えた史料については分析を引き続き進めているところである。助成期間中は幸いにも、カトリック側の史料については公刊資料、手書き資料ともにほぼ網羅することができた。その分析結果は（暫定的ではあるが）、上に述べた次第である。

しかし、阮朝側および文紳側の史料については従来の公刊資料の利用に留まった。阮朝の宮廷内部の動きを詳細に知るためには、皇帝が手を入れた硃本や、重臣たちの手になる皇帝への上奏文の調査が欠かせない。文紳や地方長官が個人的に書き残した文集も存在する可能性がある。

本年から来年にかけて、ベトナム国内においてこれら漢文・チュノムで書かれた関連史料の所在を調査する予定である。硃本の一部についてはマイクロフィルムとして所蔵するハーヴァード大学イエンチン図書館での閲覧が比較的容易である。これらの調査を完了した後、最終成果として単行書を出版する予定である。

謝 辞

公益財団法人三島海雲記念財団よりこのたび助成頂きました学術奨励金なくして、本調査研究は遂行が不可能でございました。ここに記して関係各位に厚くお礼を申し上げます。

主要文献

一次資料
パリ外国宣教会文書 Archives de la Societe des Missions Etrangeres de Paris

信仰普及協会年報 *Annales de l'association de la propagation de la foi*

大南寔録正編、慶應義塾大学言語文化研究所、1963.

二次資料

桜井由躬雄：植民地抵抗運動とナショナリズムの展開（岩波講座東南アジア史、池端雪浦ほか編）、pp.51-78、岩波書店、2002.

坪井善明：近代ヴェトナム政治社会史 阮朝嗣徳帝治下のヴェトナム 1847-1883、東京大学出版会、1991.

坪井善明：東南アジア世界の再編（岩波講座東南アジア史、池端雪浦ほか編）、pp.105-128、岩波書店、2001.

Launay Adrien, *Histoire de la Mission du Tonkin.*, Librairie Orientale et Americaine Maisonneuve Freres, 1927.

Phan Phat Huon, *Viet Nam Giao Su. Quyen I, II. Cuu The Tung Thu*, 1965.

Ramsay Jacob, *Mandarins and Martyrs, The church and the Nguyen dynasty in early nineteenth-century Vietnam*, Stanford University Press, 2008.

Patrick J.N. Tuck, *French Catholic Missionaries and the Politics of Imperialism in Vietnam, 1857-1914*, Liverpool University Press, 1987.

Etienne Vo Duc Hanh, *La place du catholicisme dans les relations entre la France et le Viêt-Nam de 1870 à 1886*, Peter Lang, 1992.